



天野六郎殿
貴報

九月七日 房栄(花押)

尚々御人躰之儀、委細
元就へ申候条、可有御演
説候、
就爰元雑説之儀、御懇
札之通具申聞候、義隆
様御父子去朔日於長州
深川大寧寺生害候、其
外数輩被討果、無残所
被任存分候、珍重候、御慶
猶期後音候、恐々謹言、

「江良房栄書状」(右田毛利家文書貴重4-26)

ツタエル・ツタワル ①

大内義隆自害をめぐる「雑説」

《事件と雑説の発生》

天文20年(1551)9月1日、現在の山口県域に当たる防長両国にとって、大変大きな事件が起こりました。この地域を支配していた西日本最大の大名であった大内家の当主義隆が、陶隆房(のちの晴賢)を中心とする有力家臣たちに背かれて、長門国深川(現長門市)の大寧寺で自害に追い込まれたのです。

この事件は、大内氏の影響下にあった隣国安芸国志和東(現広島県東広島市)の米山城を本拠とする有力な国人領主である天野隆綱のもとへ「雑説」という形で伝わりました。「雑説」とは、一般的には、種々のうわさや根も葉もない風聞、とりとめもない風説を指す言葉です。

ここでは、この政変について記す当時の文書から、この「雑説」の背景を探ってみることにします。

《関係者の手紙》

上の写真は、天文20年9月7日に陶隆房の腹心である江良房栄から天野隆

綱に対して出されたものです。

この手紙にはどうことが書かれているのでしょうか。内容を意識してみます。

こちらの「雑説」についての丁寧なお手紙の内容は、主君の陶氏に詳しく伝えました。大内義隆様父子は、去る9月1日に長門国深川の大寧寺において命を落とされました。付き従っていた者たちも討ち果たし、主君の思い通りになりました。めでたいことなので、またお便りします。

(追伸)

大内家の家督相続人について、詳しいことは毛利元就へ伝えました。毛利殿から御説明があるでしょう。

《雑説の内容を探る》

この手紙に書かれていることは、当時の人にとってかなり衝撃的な内容だったと思われる。では、具体的にこの場合の「雑説」はどんな内容だったのでしょうか。それを探るために、この事件の前後の状況を整理しておきます。

実は、陶氏の挙兵は突発的なことでは

山口雑説之由

大内氏家臣連署奉書写
(県史編纂所史料1111
「山野井家文書」)

大内義興は、16世紀の初めに上洛して本拠地である山口を長期間留守にします。ここでは、その時に散見される、「雑説」を紹介します。

① 永正6年(1509)に「山口雑説」を耳にし、駆けつけた安芸国の能美氏が留守を預かる大内氏家臣から褒められています。何らかの異変が安芸国まで伝わったのでしょうか。

② 永正8年(1511)大内氏は洛北の船岡山で天下分け目の合戦を行い、前将軍方に勝利します。その様子を国許へ伝えた文書の中で、遠方だから色々「雑説」があることだろうと述べています。

なく、半ば表面化していました。詳細は、下記の略年表のとおりですが、事件の8ヶ月前には、大内義隆と陶隆房の仲をめぐって、さまざまな「雑説」がとびかかっていました。そして、天野氏は事前にその計画を知らされていて、協力を求められていたのです。

これらのことから、この事件に関する「雑説」の内容とは、政変がとうとう起こったらしいという前提で、時間の経過とともに、①義隆が館から脱出したらしい、②義隆が陶氏の追撃を受けて、日本海方面へ逃走中らしい、③義隆は大寧寺に追い詰められたらしい、④義隆はとうとう自害したらしい、というおおむね正確なものから、⑤陶氏は挙兵したが、結局は義隆と和解したらしい、⑥義隆は日本海方面でなく、吉見氏を頼って津和野へ向かったらしい、⑦義隆は船で九州へ落ち延びたらしい、⑧大寧寺で自害したのは影武者で、本物の義隆は脱出してどこかに落ち延びたらしい、⑨義隆は再起のため味方を募って、山口を目指しているらしい等々、義隆に心を寄せる人たちの希望的観測を含んだもので、本当に様々だったのではないかと推測されます。

とすれば、天野氏から陶氏への手紙には、不首尾に終わったという噂もあるが、きつとまくいったことでしょう、お疲れ様でした、今後のことは改めて相談したい、という趣旨のことが書かれていたのではないかと考えられます。

《伝わるスピード》

前述したように、この手紙は、9月1日に起こった事件を「雑説」の形で伝え聞いた天野氏が陶氏側に出した手紙に対する返書です。

手紙の日付は9月7日付けですから、事件から6日後に出されたものということになります。事件の舞台となった大寧寺と天野氏の居城米山城は直線距離にして約140km、山口と米山城は同じく約110kmです。

「雑説」が伝わる時間と手紙が届けられるのに要する日数は単純には比較できません。しかし、両者とも人を介して伝わることから、仮に同じくらいだと仮定すると、この場合の「雑説」は3日くらいで、天野氏の許へ伝わったことになります。10日も1ヶ月もかかったわけではありません。

参考までに、時代も背景もまったく異なりますが、長門～山口～東広島で、情報を伝える文書や人がどれくらいの日数で行き来したのかを紹介しておきます。

①寛正2年(1461)に大内氏は、訴訟の迅速化を図るために、分国の首都である山口と分国内の各地との往来に要する日数を定めた法令を出しています。これによると、長門～山口は2日半、山口～東広島は7日となっています。つまり、山口経由だと長門～東広島は最長で9日半かかっても良いという計算です。

②江戸時代の萩藩主が領内巡検や参勤交代に要した日数は、長門～山口は2日、山口～東広島は5日くらいです。つまり、山口経由だと長門～東広島はおおよそ7日かかる計算になります。

大内義隆自害に関する雑説は、案外早く伝わったと言えるのかもしれない。

関係略年表

年	月	日	記事
天文18年(1549)	3		陶氏と山口滞在中の毛利氏が密談。
天文19年(1550)	8	24	陶氏、挙兵計画の内容(義隆隠退・義尊擁立)を毛利氏へ伝える。毛利氏は、陶氏の要請に応じて安芸国内で天野氏や吉川氏などに対して多数派工作を行なう。
	9	24	陶氏が山口今八幡宮・三宮両社の祭礼に参詣する義隆を襲うとの風聞が流れ、陶・義隆ともに兵を集める。
	11	27	陶氏、暇を請い本拠の富田へ去る。
	11		東大寺が陶氏の調伏を行う。
天文20年(1551)	1		義隆と陶氏の仲をめぐって様々な雑説が飛び交う。
	5		陶氏、挙兵計画の内容を変更(義隆父子殺害・大友晴英擁立へ)。
	8	2	毛利氏と申し合わせ、陶勢は厳島を占領。毛利氏は安芸佐東郡を占領し、大内氏の城番を退去させる。
	8	28	陶氏、挙兵。山口へ攻め上る。
	8	29	陶氏家臣の椋木氏が、義隆側の能美備後守を香積寺門前で討ち取る。同じく美祢郡徳林庵に立て籠もった龍崎隆輔などを討ち取る。
	9	1	大内義隆父子、長門大寧寺へ追い詰められ自害。
	9	4	毛利氏、大内方の平賀隆保の拠る頭崎城を攻略する。
	9	4	陶氏、石見国人周布氏に義隆殺害と家督相続人の擁立について知らせる。
	9	7	陶氏家臣江良氏が、安芸国人天野氏に義隆殺害について知らせる。
9	19	これ以前、毛利氏は豊後大友氏に陶氏挙兵の成功を祝した書状を認める。	